

## 「種山ヶ原は今③③」

7月11日えさし東小学校のキャンプと星空観察会。今年も講師依頼があったが、奥州宇宙遊学館長さんに講師をお願いした。



7月12日～17日 賢治の森・遊歩道の草刈り

東菊の種も落ち具合を見て、草刈りを実施した。田村、菊池敬、千葉、鶴田、平沢の6名で3日かけて草刈り。



鬼百合



ウバユリ



山百合



山アジサイ



クマイチゴ





7月25日～28日 物見山駐車場周辺、物見山の草刈り  
菊池敬、田村、千葉、平沢、千田 5名で実施。刈るのは楽だが、草  
処理が大変だ。4日もかかってしまった。



9月1日旧盛街道 「山本七里塚」の整備 文化財調査委員会



中沢の水車小屋とオニユリ <屋根に鬼百合の花が咲く>



鬼百合を咲かせるために、  
屋根のてっぺんに球根を  
植えたと聞いている。  
貴重な文化財だと思う。  
お世話していた浅倉さんが  
去年亡くなられ、今後どう  
するか、それが問題だ。



9月1日～10日 遊歩道・駐車場周辺草刈り  
見晴台入口案内板設置「空と雲と草原の見えるベンチ」

千葉、平塚、菊池敬、山崎



10月5日～20日 賢治の森・遊歩道・物見山駐車場周辺草刈り  
千葉、平塚、山崎



10月25日物見山草刈り <千葉在住の千葉敏夫さんからおにぎりの差し入れ>  
千葉、平塚、菊池敬、田村、佐藤、鶴田、山崎





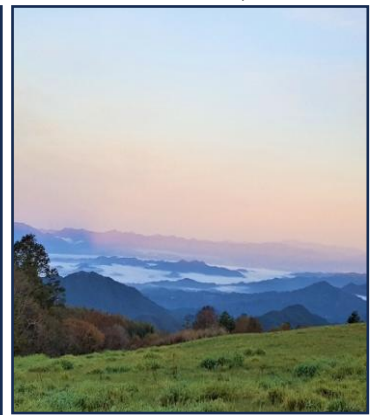
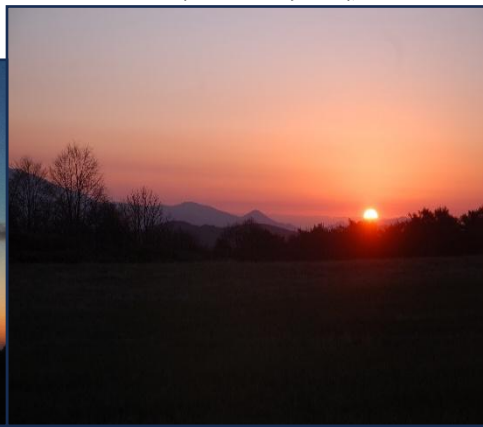


**「秋の種山ヶ原の朝」**

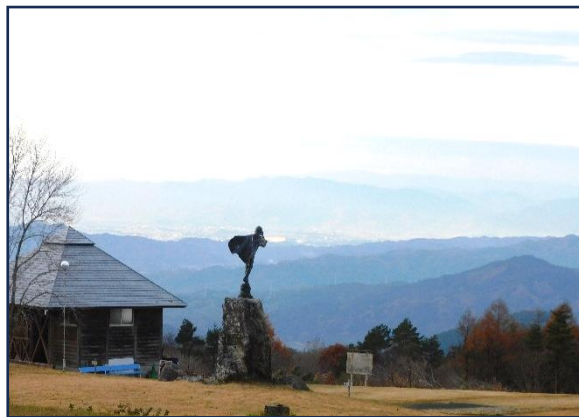
種山ヶ原の朝

種山から

雲海



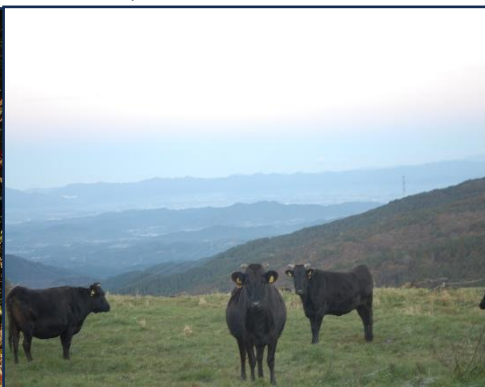
風の又三郎・星座の森



詩碑「牧歌」賢治の森

放牧 5月～10月

草刈り 賢治の森



物見山のアメダス

大岩から

物見山の草刈り



概ね 11月3日～4日午前4時30分からの撮影

## 「佐々木喜善と宮沢賢治との出会い」

宮沢賢治は明治29年生まれ、喜善は明治39年生まれの10歳違い。詩人であり童話作家の賢治と「日本のグリム」喜善には、やはり出会いがあった。

「ザシキワラシを研究していた喜善が、賢治の発表した『ざしき童子のはなし』を自著で紹介したいという手紙を送ったことがきっかけである。賢治から返事が届き、遠野の喜善は、花巻の賢治の家を訪問するようになる。当時賢治は病床に伏していたが、喜善と面会して親交を深めた。」

＜石井正己氏の講演から＞

※次号から「佐々木喜善・柳田國男と炭焼き職人浅倉利蔵について」



# 「人首物語①」

人首とは、岩手県奥州市江刺米里の昔の呼び名  
今も地名に人首町、人首川等がある。苗字もある。

## I、「江刺郡昔話」と人首

### 1、「佐々木喜善、柳田國男と新田経(米里村第7代村長)」

#### (1) 七代目村長新田経と柳田國男と人首

「遠野物語」を編集した柳田國男は経済産業省・農林水産省の官僚となり、衆議院事務総長を務め昭和21年退官。退官後、「日本人とは何か」という問いの答えを求め、日本各地を調査旅行した。その時に人首を訪れ、新田村長と出会った。その時のことが講演で語られています。

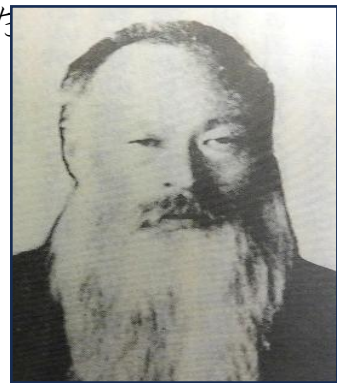
今日お話ししようと思っている大正11年の「江刺郡昔話」は、日本における「昔話」の民俗学的研究の最初だと広く伝えられている。佐々木喜善にとっては、これが活字になった最初の昔話集でした。

柳田は大正9年に、三陸海岸を北上する徒歩の旅の旅行を行いました。旅先から送られた紀行文は『東京朝日新聞』に「豆手帳から」という表題で連載されました。その途中、内陸へ入り、江刺郡の人首から五輪峠を越えて小友に抜け、そこから遠野町へ入りました。一旦南下して世田米から唐桑半島に行き、再び船で釜石に上がりました。釜石で佐々木喜善と合流して、徒歩で北上し、最後が小子内浜(種市)の清光館でした。「豆手帳から」は、後に『雪国の春』に収録され、広く読まれました。

その中に「古物保存」という文章があります。それは「陸中人首の村長さんは、故千家尊福男に少し似た白髪の翁である」という一文から始まります。一体どんな村長さんだったのかということ

を調べたことがありまして、そこに写真を入れておきました。

この翁とは新田経という人で、『江刺郡昔話』の中でも中心地にトリミングするなる米里の公民館に飾ってあったものです。柳田の文章は、こうした資料とつき合わせつつ読み直してみると、ずいぶん違うイメージを作り出すことができるのではないかと思います。更に柳田は、この人は沼辺氏の遺臣であると言います。経歴を調べてみると、新田経の祖父は沼辺家に仙台から招かれた人であったそうですから、柳田の直感は見事に当たったことになります。



## (2)「佐々木喜善、柳田國男と人首」

### —浅倉利蔵中心に—

#### 1 「口伝え」を「活字」に

村役場の記録に「只館山と五輪峠だけを大切にしている」と新田村長が指摘している。柳田も「村々が史跡記念物の保存を重視しているが、**形のないものを大切にしなければならない。**」また、喜善も、江刺郡の山村には「昔話」がたくさんありそして、口伝えで消え去るものを「形」に、即ち活字にし、本にして、みんなに読まれることを意識していたと柳田は語っている。

柳田國男が調査旅行中の紀行文を「東京朝日新聞」に送り、「**豆手帳から**」という表題で連載されており、後に「**雪国の春**」として出版されています。人首に関わる部分「古物保存」と『**竈神之由来**』の一部を紹介します。

#### 2 『古物保存』

陸中**人首の村長さんは、故千家尊福男に少し似た白髯の翁である。**自分はこの無口な老人に一言を費やさしむることなくして、一目見てただちにそれが沼辺氏の遺臣であることを知った。すなわち偶然に討死をしなかった勇士の子孫である。人首の嶺の北は**小径に富んだ小友の山地である。**

<略>※下線は柳田一行が小友で道に迷い民家に世話になったため？

#### 3 『竈神之由来』(かまがみのゆらい)

昔々爺と婆があった。爺は山に柴刈りに行って、大きな穴を一つ見つけた。こんな穴には悪いものが住むものだ。塞いでしまった方が良くと思って、一束の柴を穴口に押し込んだ。そうすると柴は穴の栓にはならず、するすると穴の中に入って行った。また一束押し込んだがその通りで、それからもう一束もう一束と思ううちに、三月の間に刈った柴を、ことごとく穴に入れてしまった。その時に穴の中から、美しい女の人が出てきて、たくさんの柴をくれたお礼を言い、一度穴の中に来てくれという。あまり勧められるので、つい入ってみると、中には目のさめるような立派な家があり、その家の脇には爺が三月かって刈った柴が、ちゃんと積み重ねてあった。ご馳走になって帰ってくる時

これをやるから連れて行けと言われたのが一人の子供であった。何とも言えぬみっともない顔の、へそばかりいじくっている子であった。是非くれるというからとうとう連れて帰って家に置いた。あまり臍をいじくるので、爺が火箸でちょっと突いてみると、ぷつりと金の小粒が出た。それから一日に三度ずつ突くと臍から金が出て、爺の家は富貴になった。ところが婆は欲張りの女で、もっと多く金を出したために、爺の留守に火箸を持って、子供の臍をぐんと突くと、金は出ないで子供は死んだ。爺が戻ってこれを悲しんでいると、夢にその子供が出てきて、泣くな爺さま、俺の顔に似た面を、毎日のよく目にかかるところに掛けておけ、そうすれば家が栄えると教えてくれた。子供の名前は**ヒョウトク**といった。それ故にこの辺の村々では今日まで、醜いヒョウトクの面を木で作って竈の上に掛けて起き、これを**江刺郡では「かまぼとけ」**とも呼んでいる。

## ＜米里のかまぼとけ＞ 明治22年人首村から米里村へ

米里では写真のような「かまぼとけ」が今も飾られています。柳田國男の「雪国の春」では木で作られていると書かれています。家を建てる時、壁塗りの粘土で作られ、家を守る神様仏様として竈のそばの柱に飾られていたようです。



## 2 浅倉利蔵と佐々木喜善の出会い

—佐々木喜善の日記から—

- 大正9年4月5日 午前和野にいる浅倉利蔵という人、自著発明の炭窯の草稿を持って来て訂正を謂う。
- 6月30日 午後浅倉利蔵来る。例の炭窯の本について。浅倉に頼んで玄文社に森さんの書を注文に出す
- 7月2日 朝から浅倉利蔵に押しかけられて木炭焼き窯の原稿を直して終日費やす。  
同君、細君同伴にて来て蚕を手伝う。
- 7月3日 蚕全部上簇す。浅倉君の細君が来て手伝う。  
※上簇＝蚕の繭作りの段階

## 3, 柳田國男は浅倉利蔵を次のように書いています

この話の大部分は、ただ一人の話し手即ち米里村字人首の浅倉利蔵と言う40歳ばかりの、炭焼きを渡世として方々の山々ばかりを涉り住まわって居る人の口から得た。此の人は決して偽話や作り話はせぬ。実に天才的な誠実な質の人である。木を伐りながら鉛筆をとって炭窯の本を書いている。真にこういう人が全部土語で極めて質朴な、そして自由な語でぽつぽつ語ったものであるから、読者も筆者共に安心して読んでいただきたい。

※喜善の日記の中に、数年浅倉利蔵の名前が出てくる。

大正11年9月8日「浅倉の文利ちゃんからはがきがくる」

※75歳以上の人は、文利ちゃんを知っていると思う。



## 4 「江刺を歩き」

「江刺郡昔話」の原稿を送り、利蔵から依頼されていた「炭窯づくり」の冊子を完成し、喜善は江刺郡に向う。

大正11年になって7日程、江刺・紫波あたりを旅したのですが、その時の紀行文です。『岩手毎日新聞』の大正11年3月8日から19日まで9回にわたって書かれた「江刺から」という文章があって、これが大体吸収される形で「江刺を歩き」になりました。

大正11年

2月9日 浅倉来り刷物渡す。これで世の責任を果たしたり。

10日 江刺郡の旅行に出かける。夜、伊手村和野という所の熊野神社の蘇民引きを見る。夜明けの4時について全部見残して宿に帰る。

11日 伊手村より鴉堂山を越えて人首に來り。鴉神社を見る。人首に宿り、この夜窯仏を見る。

12日 米里村字中沢に麓山神社を見、窯仏を見、人首を立ちて玉里村の白山淵を。夜田植え踊りなどを見、岩谷堂に着く。人首を午後4時立ち8時過ぎ着く

13日 岩谷堂を立ち、水沢へ行く <別当が自力で再建>



## 「佐々木喜善と宮沢賢治」

宮沢賢治は明治29年生まれ、喜善は明治39年生まれの10歳違い。詩人であり童話作家の賢治と「日本のグリム」喜善には、やはり出会いがあった。

「ザシキワラシを研究していた喜善が、賢治の発表した『ざしき童子のはなし』を自著で紹介したいという手紙を送ったことがきっかけである。賢治から返事が届き、遠野の喜善は、花巻の賢治の家を訪問するようになる。当時賢治は病床に伏していたが、喜善と面会して親交を深めた。」 講演から